

有賀長伯『初学和歌式』翻刻 その一

水上雄亮 (国語科)

はじめに

筆者架蔵の『初学和歌式』を翻刻する。半紙本七卷七冊、刊記は元禄十四年。外題には「改正 初学和歌式 讀方」
増補

とある。同書の刊本は元禄九年を初版とし、以降元禄十四年、正徳三年、安永二年の版が存在する。著者の有賀長伯は寛文元年生まれ、元文二年没の国学者・歌人で、晩年は大阪に住んだという。それに関連するかは不明だが、元禄九年版の版元は京都の「長谷川傳兵衛・木村五郎兵衛」だったが、十四年版の版元は「久寶寺屋作兵衛・河内屋太郎兵衛」とあり、屋号から大阪の版元だと思われる。なお、後の正徳版の刊記には「華洛 中野六右衛門 武江 須原茂兵衛 撰坂 柏原清右衛門」と、京・江戸・大阪の三書肆が名を連ねていることを記しておく。

平間長雅に二条派の歌学を学び、「有賀家の七部書」と称される書物を記した。『和歌世々の葉』、『初学和歌式』、『浜の真砂』、『和歌八重垣』、『歌林雑木集』、『和歌分類』、『和歌麓の塵』がそれである。平間長雅の師は望月長孝で、長孝の師が松永貞徳にあたる。長伯自身にも多数の門人がおり、『近世畸人伝』で知られる伴蒿蹊はその一人である。

本書はこれまで未翻刻だが、率直にいつて稀覯本とは言い難く、文学史的にもさほど評価されていない。しかし、二条派、つまり正統派の歌学において確立された歌語の「本意」について参照するなどの目的には好適な書物であり、

翻刻には一定の意義が認められると思われる。

なお、翻刻にあたっては可能な限り底本を尊重したが、一部の字体を改めた。また、適宜濁点や句読点を付し、仮名を振った箇所がある。なお、適宜筆者架蔵の安永二年版も参照した。

翻刻本文

ニオ凡和歌の讀方を教へたるいにしへの髓脳式等、世に流布するも多しといへども、稚児の初学は遍かく窺ひ、ひろくあまあひて握翫せざれば、古賢の庭訓は濱千鳥跡ある物から、沖津玉藻のよるべなきに似り。仍（よつ）諸抄を拔翠し師説等をまじへて全部七冊、初学和歌式と号奉より一オニウ童蒙の助とせんが為なれば、ことあさはかにして必ずみる人のあざけりをえむこと

うたがひなきものをや

初学和歌式目録

○一卷一ウ

- | | | | |
|----|---|------------|----------------|
| ニオ | 一 | 題を可ニ心得事 | ○五卷 |
| 一 | 一 | 題に心を深く可レ入事 | 一 本歌とりやうの事 |
| 一 | 一 | 一字題といふ事 | 一 返歌の事 |
| 一 | 一 | 結題といふ事 | 一 兼題歌当座の歌讀やうの事 |

- 二ウ
- 一 題をわがち可^レ読事
 - 一 題を初五文字に置くまじき事
 - 一 題をまはすといふ事
 - 一 題を思はせて讀事
 - 一 題を本説にゆづりて讀事
 - 一 題を本歌にゆづりて讀事
 - 一 題を賞翫すべき事
 - 一 題のゆるぐといふ事
 - 一 題を上下にする事
 - 一 難題の事
 - 一 經文の題の事
 - 一 傍題の事
 - 一 片題の事
 - 一 落題の事
 - 一 おもしろく讀れぬ題の事
 - 一 実字の事
 - 一 虚字の事
- 自五卷至七卷
- 一 和歌執行の事
 - 一 和歌学問の事
 - 一 歌を讀べき心持の事
 - 一 歌を讀行跡の事
 - 一 和歌の詞の事
- 七卷
- 一 和歌詞諸抄註积拔翠

○自二卷至四卷

- 一 題に相應・不相應並四季・恋・雜の題讀方の事
- 一 名所の歌讀やうの事二ウ

三才初学和歌式

一卷

題の讀方

○題を可_二心得_一事 題を心得るとは、先題の文字の中には實字あり、虚字あり。實字・虚字の事次にしるしおわんぬ或は題の心を一首にまはして讀題あり。まはしてあしき題あり。次にしるす或其題に相應の事あり、不相應の事あり。次にしるす各心をつくべし。自身の了簡に不_レ及事は此道の巧者に尋べし。これ先達のおしへ也。

○題に心を深く可_レ入事 題にこころをふかくいるとは、たとへば

一 知題抄飛鳥井家の抄云。祝にはかぎりなく久しき心をいひ、恋にはわりなく浅からぬよしをよみ、若(もし)は命にかへて花をおしみ、家路を忘れて紅葉を尋んごとく、其物に心ざしをふかく讀べしと云々。引歌

祝

新古今

俊成

君がよは千代ともさゝじ天のとやいつか月日のかぎりなければ

花

千載

通親(三才)

(三ウ)さくら花うきみにかふる例あらばいきて物をば思はざらまし

紅葉

同

素意法師

故郷に問人^(とむ)あらば紅葉々のちりなん後をまてとこたへよ
かやうの心也。恋はいづれもあさからぬ心なれば不^レ及^二引歌^一

一 悦目抄基俊作云。深雪などいふ題を得てふかしとよめらむ心、うかるべし。たゞふみわけがたしとも、かきわけて
など、ふかき事にたとへ讀たらんはいとやさしかるべし。恋・述懐の題にかやうのこと、おもかるべし。これになぞ
らへてしるさずと云たる。是、深雪といふ題を得て思ひめぐらす風情もなく、詞にあらはしてふかきとよめるは、思ふ
所すくなくて、なにの聞どころもなければ也。惣じての題、如此心得べき也。

一 庭訓抄為世卿之作云。暁・夕とあらん題を暁・夕とよめるはよろしからず。いかにもね覚、横雲、鳥のね、有明月
などめぐらして可^レ詠。夕の文字、又入相の鐘、雲のはたて、など讀べし。自余准して知るべしと云々。これ又、題に
ふかく心を入よとの三ウ(四オ)こと也。暁・夕とある題には、必ずかくよめとにはあらず。たゞ、其題をふかくめぐら
して讀との大綱也。あかつきとあらん題に、こともなげにたゞ暁といいたるばかりにてあかつきの詮なければ、あし。
それを有明の月、横雲などいへば有明横雲につきて、又、趣向も出来べければ也。されど暁・夕といひても一首に暁・
夕の思ひ入ふかくは、これ格別の事也。引歌

暁更時雨 千載集 撰政前太政大臣(九条兼実)

ひとりねのなみだや空にかよふ覽^としぐれにくもる有明の月

同 続古今和集 俊恵

いでやこの時雨をとせぬあかつきも老のね覚は便ありけり

暁霞 延文御百首 家隆

山かつら暁かけてよこ雲のたな引山にたつかすみかな

夕花 亀山殿七百首 為藤

花をみる心ひとつにいとへとやよそにぞいそぐ入相のかね

秋夕雲 白川殿七百首 為家四才

(四ウさらでだに心うかるゝたくれの雲のはたてにあきかぜぞふく

一 三賢秘訣為家卿作 云。朝霞とあらん題に朝がすみと詠じ、野虫をのべのむしのね、暁鹿をあかつきの鹿、夕時雨を夕しぐれ、夜千鳥をさよちどりなど讀たらんは、無下に浅く侍るべしと云々。これは、朝霞にて上句に朝の心をいはず下句に霞をよみ、上句に霞をいはず下句に朝をよむべし。又朝といふには朝日影、曙の空、朝戸あくるなどいふやうに、思ひめぐらして、一首に朝の景気を思ひめぐらすべし。朝といひたるばかりにて、朝の思ひ入なきだに無下のこと也。まして、朝の霞をやがて朝がすみと云つくしては、^{(s)(u)(i)(t)}残 四句になにごとをかいふべき。とかく一首に朝の霞をよくく思ひめぐらして、上句下句よく連続する様に心がくべき也。自余皆准^レ此知べし。引歌

朝霞 続古今 藤原隆佑

朝日影また出やらぬあし引の山はかすみのいろぞうつろふ

野虫 続千載 大藏卿隆博四ウ

(五才あはれとはいづれを分て秋のゝ^(野)におほかるむしの声をきかまし

鳴鹿 新拾遺 為氏

つれなさの例はしるや男鹿の妻とふ山のあり明の空

夕時雨

続古今

藤原範忠

風さはぐ夕のそらの村雲に思ひもあへずふるしぐれかな

寒夜千鳥

続古今

源雅言

汐風もよや寒からし沖つ浪たかしのはまにちどりなく也

これらにて可_二心得。右題に心をふかく入るとはかやうの事也。よくく可_二了知_一もの也。

○一字題といふ事 一字題とはたとへば雲・霞・露・霧・梅・柳・鶯・月・花・雪、かやうのたぐいをいふ也。

一 京極黄門庭訓抄定家卿作云。一字題をば幾度も下句に頭あちはすべしと云々。下句に頭はすとは、たとへば花の題を得ては、幾度も花を下句にをくべき也。いかにとなれば、上句に花をいひつくしては、下句に題の心よはくなる故也。

又和歌用よつ五才（五ウ意といふ物に、一字題は徳を上句にいひて、題を下句に置べしと云々。徳を上云とは、花ならば上句に色・匂、霞は上にたつ・なびく、鶯は鳴、さえづる、月は光・影・照す・さやかなる、雪は降りつもる・かきくらす、など云類也。かくのごとく、上句につまどらで、下句に俄に月・花など題をあらはしぬれば、題ゆるぐとてきらふこと也。よくく可_レ心_レ付。これは一字題にかぎらず、結題にも皆此心あるべき也。

一 近来風體抄後成恩寺良基作云。文字もすくなく、やすくとある題をば、少やうありげに讀なすべしと云々。文字もすくなく、やすくとある題とは、一字題などの事也。やうありげに讀とは、一字題など文字すくなければ、其題により所あることをずいぶんに思ひめぐらして、たくみにいひめぐらせといふこと也。たとえば、清輔朝臣の歌に、露と云一字題にて

たつた姫かさしの玉の緒をよはみ乱にけりとみゆる白露五ウ

(六才此歌一字題の手本になる歌也。猶習ひありとぞ。

○結題と云事 むすびだい むすび題といふは、題の文字、三字・四字・五字などあるを云。たとへば、初春霞、雪中子日など云やうの題也。これ初春に霞をむすび、子日に雪をむすびたる也。さて結題の文字の中には、虚字・実字次にしとてあり。それをよくく心得て讀べき也。ことにむつかしきもの也。其結題の讀やうはいかに心得べきぞといへば、よくく其題の古歌をみて讀かなへやうを可レ覺悟。あるは、題の心を一首にまはし、或は本歌、又は本説などによりて讀べしと、近來風體にもみえたり。猶心に不レ落題は此道の巧者に尋べし。

○題をわかち可レ讀事 是はかの二字・三字・四字ある題を一所に置べからず。上下にわかちて讀べしとの心也。

一 京極黃門庭訓抄云。二字・三字より後は、題の字を甲乙こうおつにわかち置べし。結題を一所に置ことは、無下の事にて待るとかやと云云。甲乙こうおつに置とは、上句・下句に分てよむべしと也。一所に六才(六ウ置とは前にもあるごとく、朝霞をあさかすみ、野虫をのべの虫のね、などと云類也。又、題の字を甲乙におかで上句にいひつくすと云は、たとへば

一 阿仏口傳あぶつぐでんに、題の文字を上句に皆讀はて、下句に云ことのなさに、すぐるなることづもをつづけたる、いとみぐるしとみえ候。ある人、山家卯花と云題にて、山里の垣本に咲る卯花はと讀て、すゑはなにと讀べしとも覺え候ば、さりけるやらん、わきかべぬれる心地こそすれ、と讀て候ける。いとおかしとて候きと云云。ケ様のことにて准じ知べし。山家卯花と云題にてよまば、たとへば

山家卯花 後拾遺

跡たゞでくる人もなき山里に我のみみよと咲る卯花

○題を初五文字に置まじき事 五もじに置とは、たとへば鶯といふ題をとりて、初五文字に鶯の、など先打いづる類也。これはことにきらふと也。六ウ

(七オ一) 京極中納言相語定家卿作云。題は初の句ばかり、もじは後の句ばかりにて、其こともなきものゝ歌多く領ずる、いはれなきこと也。かつは後京極殿御会六百番歌合に、余寒といふことを猶寒くと讀たる人ありき。讀上し時、五もじを以、題あらはれぬ。さてありなん、はて讀ずともといふ事ありきと云云。初の句ばかり、若は終の句ばかりにて、其こともなき物の歌を領ずるとは、題の文字を初五もじにいひつくして、第二句より下は其題により所なきことをいひ、又は題の字を終の句ばかりにいひて、上句にはゆへもなきものゝ歌を多く押領おうれうすること也。いかにも題の字は一、二句より其よせあることにて、あしらひて第三、第四に置べき也。されど、毎度かくのみはなりがたく、歌も出来がたし。先(まず)かく心得て、さて又自然に題の字を終におかば、上句によせある詞をもとむべし。よせの詞とは、花には香・色・咲、月には影・光の類也次の題の所にくはし。如此ときは、たとへ終にあらはしても其わづらひなし。又、題七オ(セウを五文字にあらはすこともやうによるべし。たとへば

一 八雲口伝為家卿作云。題は上句に讀つくしたるはわろし。たゞ一句に讀たるもわろけれど、堀川院百首の題などは一字づゝにてあれば、さやうならん題数も多く讀んには初五もじによみたらんもくるしからず。但(ただし)それも一首など讀ん題に、初の五もじに讀入たらんは無下に聞ゆべしと云云。これにて可心得^一。されど題数多ければとて、むざと五もじにいひつくしてくるしからずと云にはあらず。たとへ五もじにあらはさば、第二句より下に其題ゆるがぬやうに、よせある詞にてつゞくるがよき也。初五文字にあらはせる歌、たとへば

花 新古今

殷富門院大輔

花も又わかれん春は思ひいでよ咲ちるたびの心つくしを

月 同 太宰大弑重家

月みれば思ひぞあへぬ山たかみいづれの年の雪にあるらん

落花 同 雅経七ウ

(ハオ花さそふ名残を雲に吹とちてしばしはにほへはるの山風

如レ此もあればくるしからざる。よし、あしきと云はたとへば、

余寒 六百番歌合

猶さゆるけしきにしるし山桜また冬こもるこずゑなるらん

此歌、「五もじに題つきたり」と定家卿の難じ給へり。題の余寒は猶寒ると五もじに云つくして、山桜・冬籠・梢やうなき物也。

○題をまはすといふ事 題をまはすと云は、題の五文字を詞にいださずして、一首に其心をいひまはしたるを云也。

二字、三字、四字、五字の題にあること也。大方、たいある躰有字はまはすべからず。用の字はまはすべし。體ある字とは月、日、雨、雲、露、霧、霞、山、岡、野、海、川、梅、柳、松、桜、萩、萩、薄、菊、菊、紅葉、雪、氷、霰、鶯、郭公、虫、鹿などの類也。用の字とはたとへば、尋、待、忍、逢、稀、隔、落、思、述、言、遠、近、遥、幽、見、聞、送、忘、深、浅、添、半、留などの類、不あひてかぞふレ可二勝計一。准じて知べし。

一 近来風體云。題の文字をあらはさで讀事は、上手達者のしわざ也。初心の人は然べからず。近くも為明卿も讀な

をしてハオ（ハウ侍りきと云云。題をまはすは殊に大事のもの也。あしくすれば、題の心ならで落題らくていになる事あり。されど文字数多題はことくくいひつくしがたければ、まはさで不叶事もあり。よく心得てまはすべき文字、まはすまじき文字を分別してよむべき也。

一 和歌用意二条家之抄云。尋^レ花、待^二時鳥^一などの題にては、尋ぬる、待といふ言葉を無^二左右^一讀ずとも心はふかく尋、あながちに待べし。又、遠し近しなど詞の字、以^レ之准敷。古禅門（為^レ多、遠山雪、一

風かよふ雲も外山にしぐれけり重なるおくの嶺のしら雪
又同題を真観房、

さらでだに跡うづむらん深山路にさこそは雪の降つもるらむ

遠の字、以^レ之可^二心得^一。又恋・旅等にも結びたらん詞の字をば、かくのごとく可^レ数敷、と云々。前の歌は、重なりおくの嶺の白雪と云に、遠の字をもたせたり。次の歌は、跡うづむらんみ山ちと、遠山をみて思ひやりたる也。ハウ

（九オ一 悦目抄基俊作云。題を心得べきやう、題の文字は三字・四字・五字有題も 必^{（かならず）}讀べきもじ、讀まじきもじ、まはして心を讀べき文字、さへて讀べき文字の有をよくく心得讀べき也。心をまはして讀べきもじをたゞあらはに讀たるもわろし。たゞあらはに讀べきをまはして讀たるも、くだけてわろく聞ゆると昨近も古人も申されけりとかた

られし。かやうのことは習ひ傳ふべきにあらず。我心得てよむべき也と云云。題をまはしたる証歌

処々立春

雪玉

逍遥院（三條西実隆）

誰里もけさや打とけ鳥が鳴あづまよりくるはるのひかりぞ

たが里もけさや打とけ、といふに処々の心あり。

霞隔遠樹

続古今

定家卿

みつ汐にかくれぬいその松のはもみらく(見)く(少)なく霞む春哉
みらくすくなく霞、といふに帰る心をこめられたり。

梅香留袖

新古今

有家

散ぬれば匂ひばかりを梅花ありしや袖にはるかぜのふく九才

(九ウ) 静花見

続古今

太上天皇

めかれせぬやどの桜の花さかり我心さへちるかたぞなき

めかれせぬ、にみ心あり。我心さへ散かたぞなき、に静の心有。

帰雁幽

白川殿七百首

前左大臣

かへる雁霞のよそに鳴すてゝ猶は雲井に遠ざかるかな

郭公早過

続後拾遺

匡房

海人のかるいらこか崎のなりのりその名のりもはてぬ子規かな

早苗多

同

為世

けふも又とる手あまたにいそげども山田のさなへ猶ぞつきせぬ

とるてあまた、といひて猶ぞつきせぬとあるに多心あり。

五月雨久

伏見院三十首

御製

けふ迄は五月の日数さながらにをやまぬ雨の中にすぎぬる

五月のひかずさながらに、といふに久心あり。

草花告_レ秋

金葉

源縁法師

咲にけり口なし色の女郎花いはねどしるしあきのけしきは九ウ
(十オいはねどしるし、に告心あり。

二星適逢

家集

俊成卿

七夕の舟路はさしも遠からじなど一とせにひとわたりする
一年に一わたりする、といふに適逢心あり。

遠近秋風

玉葉

権中納言兼季

吹しほり外山にひゞく秋風に軒ばの松も声あはすなり

外山にひゞく、に遠の字をもたせ、軒ばの松、に近き心あり。

閑庭露落

新古今

基俊

庭の面にしげる蓬にことよせて心のまゝにおけるつゆかな

茂る蓬、など閑庭のさま也。心のまゝ、に落心あり。

鹿声両方

千載

覚延法師

みやぎのゝ小萩が原を行程は鹿のねをさへわけてきくかな

鹿のねをさへ分て聞哉、といふに両方にて鳴心あり。

寒草 纒_(わすれ) 残

続古今

定家

吹風をやどすこのはの下ばかり霜置はてぬにはのふゆくさ十オ
(十ウやどす木のはの下ばかり霜置はてぬ、と云に纒殘心あり。

雪来スレ深

玉葉

觀意法師

けふまでは雪ふみ分てかへる山これより後は道もたえなん
けふ迄は雪ふみ分てかへる山、といふに來深の心あり。

雪満ニ群山

新統古今

前大納言親雅

つくば山は山茂山おしなべて残るかげなくつもるゆきかな

つくば山は山しげ山、に群山の心あり。残るかげなく、に満心有。

初恋

千載

肥後

思ふよりいつしかぬる（通）袂哉なみだや恋のしるべなるらん
思ふよりいつしかぬる（通）、といふに初の心あり。

忍久恋

続後撰

小宰相

人しれぬ心ふるす年月のいのちとなれる程ぞつれなき

人しれぬ、に忍心あり。心にふるす年月、といふに久しき心有。

見恋

続古今

定家

うしつらしあさかの沼の草の名よかりにも深きえにはむすばで十ウ

(十一)オ浅かの沼の草の名、とはかつみと云草也。かつみを見心にとりなしてよみ給へる也。

尋恋

新古今

慈圓

心こそ行ふもしらね三輪の山杉のこずえのゆふぐれの空

三輪の山いかに待らん年（経）ふとも尋る人もあらじとおもへば

我やどは三輪の山本恋しくばとぶらひきませ杉たてるかど

此三首の歌より、みわは尋ることの名目になれり。仍、みわの山杉の梢、といふに尋る心をまはし給へり。

契恋

新古今

同

たゞたのめたとへば人の偽を重てこそはまたもうらみめ

ただたのめ、といひ、たとへば人の偽りを、などいふあたりに契心あり。契とは、いつの比あはんなど約束すること也。

待恋

玉葉

左大将実泰

をのづから偽ならぬ夕ぐれもあらばと頼むよさへふけぬる

偽ならぬ夕ぐれもあらばと頼む、といふに待心まはしたり。十一オ

（十一ウ）稀恋

続千載

源兼氏

よしやたゞさても経ずは天川おなじみゆ瀬にたぐへこそせめ

七夕の年に一夜の契によそへて、稀心をもたせたり。

逐日増恋

千載

院

恋渡るけふの泪にくらぶればきのふの袖はぬれじかすかは

山家送年

新古今

寂連法師

立いでゝつま木折こしかたをかのかき山ぢとなりける哉

入そめし初は立いでゝつまぎ折つる所も、年経ぬれば、今は木しげりて深山のごとくなれる心也。年月をへたる心、よくまはりたり。

遠鐘幽

新勅撰

入道三品親王

初瀬山あらしの路の遠ければいたりいたらぬかねのおと哉

いたりいたらぬ、に幽なる心まはりたり

竹有_二佳色_一

新千載

等持院贈左大臣

百敷や生そふ竹の数ごとにかはらぬちよの色ぞみえける十一ウ

(十二)牙かはらぬ千世の色、といふに佳の字あり。色ぞみえける、に有の字の心あり。此たぐひ不_レ可_二勝計_一。各淮いて可_レ知也。

○題を思はせて讀事 思はせて讀とは、題をまはして讀といふに大體同じ事也。題の物を詞にいださずして、一首にいひまはして、其物よと思はせる也。

一悦目抄云。その物のすぐ_二に讀れぬ_一には、聞しれなど申して讀べし。聞しれといふは、こゝをいはんとてよそを云ことなるべしと云云。聞しれといふも、思はするといふに同じ。八雲口傳云。題をよくく心得とくべき也。天象・地儀・植物・動物、すべて其體あらん物をば、その名を讀べし。三十一字の中に題の字を落すことは、ふかく是を難じたり。たゞし、思はせて讀たるもあり。証歌次にしるす天象・地儀・植物・動物、すべて其體あらん物とは、前にしる

し侍り。雲・風・月・雪・山・野・海・川・花・紅葉・鶯・子規などの、類の體ある物の事也。ケ様のたぐひは、詞にあらはして讀べき也。されど又、一十二才（十二才體）に思はせて讀といふことあり。証歌、

落葉浮水

新古今

藤原資宗

いかだしよまでことゝはん水上はいかばかりふくみねのあらしぞ

只今眼前に落葉の浮びたるをみて、こゝだにも如^レ此也。まして水上はいかばかり木葉の嵐に散みだるゝぞ、と篋士にいひかけたる也。いかばかり吹峯の嵐ぞ、といふに落葉を思はせたり。

月怨^レ水

新古今

大納言隆信

すむ人もあるかなきかのやどならし蘆間の月のもるに任せて

蘆間の月のもるにまかせて、といふに水を思はせたり。

待時鳥

五月四日歌合

五月雨にふりいでゝなけと思へ共明日のあやめのねを残すらん

全篇時鳥の歌と思はせたり。

一 愚問賢註愚問は後成恩寺殿、賢註は頓阿法師云。題の文字をあらはさでよむ事、落葉にいかばかり吹峯の嵐ぞ、といひ、子規にあすの菖十二才（十三才）蒲のねを残すらん、など讀るは題の文字なきにや。これはさるべ^(き)體にてこそあれ、左右なく初心の人など用べからざる事にや。傍例こまかにしるし申さるべし。答、題をあらはさで詠事、詩の破題のごとし。作例

花添^二山気色^一

詩歌合

定家

玉すだれ同じ緑にたをやめのそむる衣に春かぜぞふく

私此歌、難儀の歌也。一説云、古詠に「古壁丹青色 新花錦繡紋」、これ山の詩也。此心を以(もつ)詠ぜらるゝと云云。此歌、一・二句に山の心あり。下三句には花の心あり。猶口傳有歌とぞ。

紅葉流レ雨

日吉歌合

同

ふり増る泪も雨もそぼちつゝそでのいろなるあきのやまかな

袖の色なる秋の山かな、といふにて紅葉を思はせたり。

故郷紅葉

右大臣家百首

同

うつろひし昔の花の都とてのこるにしきの色ぞしぐるゝ

残るにしきの色ぞしぐるゝ、といふに紅葉の心聞えたり。十三才

(十三才)右、いづれも體ある物を詞にあらはさで、その物と思はせたり。是はみな上手のしはぎにて、初心はゆめくすまじきこと也。

題を本説にゆづりて讀事 本説にゆづるとは、題の文字多く、なにもおもしろくいひかなへがたきことを、むかしありしことの、しかも惑説ならぬただしき説によりてその説にゆづりてよむをいふな也。

一 近来風體云。むすび題をば、まはしてよむべし。又は本歌・本説をとりてよむべしと云云。証歌、

臨レ期変レ物恋

千載

俊成卿

思ひきやしぢのはしがきかきつめて百夜も同じ丸ねせんとは

臨レ期変レ物恋とは、いつ比必あはんと約束して其夜をまつに、その期に(俄)のぞんではかに約束を(俄)変じたる心也。五

字ともに実字にてことに難題なるを、やすくと本説にゆづりてよみ給へり。本説は、むかしある人女を思ひかけたるに、女のいふやう、車のしぢといふ物に百夜ねたらば(かならず)必(十三ウ)十四オあふべし、と約束したれば、男、女のいふやうにして九十九夜までかよひて、くるまのしぢの上になたり。さて今一よになりて、男、明夜はあらんと頼みつるに、其夜になりてさほることできぬとて、あはずなりぬ。これ臨レ期變レ物恋たる本説也。よつて此題にとりより給へる。至妙也。

等思二兩人一恋

家集

寂連法師

つのかにのいくたの川に鳥もいばみの限りとや思ひ成なん

等思二兩人一とは、思ふ人ふたりあるを、いづれもおなじ程に思ふ心なり。本説は、むかしつのかにゝある女を恋る男、ふたりあり。その男の心ざし、いづれもひとしかりければ、女いづれにとも思ひさだめがたく思ひわづらひしに、女のおやの云やう、さらば此いくた川にある水鳥を、ふたりながら弓にてい給ふべし。いあて給はん人に女をまいらせんといへば、ふたりの男よろこびて生田川にのぞみてこれをいるに、ひとり鳥のかしらをいる。今ひとりは尾のかた十四オ(十四ウ)をいたり。女せんかたなくて、終にいくた川に身をなげぬ。さりければ、此ふたりの男も同じく(ま)みをしづめたるよし、大和物語にみえたり。此本説、相應なれば取用ひられたり。

題を本歌にゆづりて讀事 これも前の本説にゆづりて讀と同じ心持なり。是又上手のしわざ也。証歌、

待恋

家集

定家卿

風(こ)あらし(し)もとあらの小萩袖にみて更行よはにおもる白つゆ

本歌古今集

みやぎのゝ本あらの小萩露を(一重)もみ風を待こと君をこそまて

定家卿歌、待心聞えず。これ、風を待こと君をこそまて、といふ待の字を本歌にゆづりたる也。かやうの心持也。

題を賞翫すべき事 賞翫するといふは、たとへば春の花・秋の月ともに賞翫の物なれど、花の題にむかひては月を忘

れ、月の題にては花はかすにもあらぬよしをいふやうの事也。たゞし、花の題にては (かならず) 必 月をおとしむべし、とい

ふにはらず。大様對々していはんならば、如^レ此当題をほむるといふ事也。すべて其題の十四ウ(十五オ)物を、いかほど

もおもしろきよしをほめ、賞翫あさからぬよしをいふべき也。これは四季の歌・雑の歌の題のこと也。恋の題にては

しからず。恋は、忍恋にては忍ぶをうきよしをいひ、待恋にては待をうきよしいふが相應也。猶、四季の題にても各

(おもむ) 趣 かはるべし。表なるべき題をおもしろくよみなどするは、又不相應也。くはしく次の題の所にしるすべし。又、

花は賞翫するをよしとて、落花を賞翫すべきにあらず。いかにも落花は風をうらみ、花をかこつよしいふが賞翫也。

それも又やうによることあり。たとへば、

一愚問賢註に云。花に風をふかせ、月に雲をかけたり候はん事、わざと好み候はん事、誠に詮なく候。丹後歌に、

霞みつゝ花ちる峯の朝ぼらけ後にや風のうさも知れん

と候は、無術おもしろき俤にて候と云云。此歌、落花を興じたれど至極秀逸なれば各別也。題の賞翫うすき歌、

朝霞 遠嶋歌合

寒かへり雪げの春の朝ぐもり霞むなのみや空にたつらん十五オ

(十五ウ御判後鳥羽院右歌、かすむ名のみや空にたつらん、といへる、題の心に思へば名ばかりの霞ぞをとるべくや、と

云云。是、霞の題を余寒にて、名ばかり霞たるよし、不賞翫也。いかにも霞の心、よくたな引たるよしあるべき也。

又、

新樹

六百番歌合

夏衣うすもえぎなる若かえで秋そめかへん色ぞゆかしき

判右俊成卿歌、新樹をば不賞して秋そめかへん色ぞゆかしき、といへる、本意はなくやと云云。是、新樹のみどりなるを賞翫せずして、秋紅葉する色がゆかしきといへる、不賞翫なるにや。又、賞翫も物によるべきこと也。たとへば、秋夕は物がなしく、たへがたきよしを云んとて、いとはしきやうにいふ也。無賞翫に例たれど、秋夕はかくいふが本意也。各、其題によりて趣かはるべし。一概に覚ゆべからざる事とぞ。

題のゆるぐと云事 たとへば、花の題にて花を上句にいはず、下句には色・句など縁の詞などをかりて、その物と聞ゆるやうに詠べき也。しかるを、上句ばかりに題をいひはて、下句に其番よ十五ウ（十六オ）せなく、又は題を終句ばかりに置いて、上四句にはそのよせなきを、題ゆるぐとて嫌ふ事也。又、結題ならば題を上下にまくばりてとり合、よく可讀也。猶くはしく、題を五もじにつくすまじき事、といへる所にしるす。

題を上下にする事

一 和歌用意に云。又題のやうにしたがひて、題の文字をば上下にする事、くるしからずと云云。上下にするとは、たとへば遠山朝霞といふを、上句に朝霞を置いて、下句に遠の山のは、といふやうの事也。これはくるしからず。

難題の事 難題とは、結題のことにむつかしき題也。臨期変物恋・等思兩人恋などの題也。又、定家卿藤川百首の題等也。

一 和歌庭訓抄云。いかにも未練の程は、日比詠じならひたる題にて詠べきよし、申事に候。わづらはしき題のたや

すくとりつきがたきは、いかにもわかるべきにて侍り。くせ題などは、ちとくちなれて後、今はとおぼえむ時、又(よみな)読習ふべく候。難題などをてがけずしては、不(じ)可(じ)叶候と云云。是、初心の十六才(十六ウ程は難題などは讀べからず。少よみつのりては、又難題をよみならはではあるべからず、となり。

経文の題の事

一 愚問賢註云。問法華経の品などの歌、讀やうは只心を取べきにや、又詞にて讀るも作例あるにや。答心をとりにたゞことによまんも、詞にかゝりてそへ讀んも、ともにくるしからず。作例次にしらす。心をとりにたゞことに讀とは、経文の心を通さずに、物心もよそへずして讀こと也。詞にかゝりてそへよむとは、経文の詞によりて物によそへてよむ事也。

法華経序品

廣度二諸衆生一其教典レ有レ量

わたすべき数もかぎらぬはし柱いかにたてけるちかひなる覽(らん)

これはことばにかゝりて侍るにや。

同随喜功德品

最後第五十聞二一偈一随喜

谷川のながれの末を汲人もきくはいかゞはしるしありける

これは、慈童が古事の菊といふ字を、聞の字によせておなじく詞にかゝりたる歌也十六ウ

(十七才同安樂行品

深入二三禪定一見ル二十方の仏を

しづかなる庵をしめて入ぬれば一かたならぬひかりをぞみる

同譬喩品

其中衆生悉是我子

みなしごとなに歎けん世中にかゝる御法のありけるものを

これは心をとりて物にもよそへず、たゞこと歌に讀給へり。是等にて准じ知べし。

傍題の事 これ第一の難とする事也。よくく心^(異)を付べきなり。

一 愚問賢註云。傍題と申こと、ふるくは題の外にこと物を詠くはへたるを申事に候歟。又、歌数ある中に、はしにもおくにもある題の事を讀たるをも、傍題と申侍歟。三十首、五十首になりぬれば、さのみ申さぬ事にや。春の歌に霞の題のあらんに、こと題に霞をよみ、秋の題の外に又露をよまんこと、これをよまでは歌の出来がたき也。又、三首、五首はことにはゞかるべく候と云云。此心は傍題に一やうあり。先、一首の中に傍題といふ事あり。それは梅の題に柳をよみそへた十七首(十七ウ)のやうのこと也。それも柳二、三分、梅七、八分程によめれば、柳はあしらひ物にて傍題にはならず。梅四分、柳六分程に聞ゆるは傍題也。証歌次にしるす。又一は、歌数よむ中に、前に梅の題あるを、又奥の題に梅をよみそへたるをいふなり。されど、これは三首、五首などの中にかやうにあるをいふ也。三十首、五十首になりぬれば、これもくるしからずと也。ことに春の題に霞、秋の題に霧・露などのたぐひは別してかるき物にて、これをよまずしては三十首、五十首はよみつゞけがたければ、わきにてくるしからずと也。これ愚問賢註の趣也。

一 同 但、七夕七首に天川とよみて、こと題に天川をよむこと、くるしかるべからずと云云。これ前にあるごとく、三首、五首等の歌には傍題ことにさるべしといへども、七夕七首などをばよみ侍るには、天川と置事、何首にてもくるしからず、といふ心也。定家卿、七夕七首に七首ながら、天川と五もじにを十七ウ(十八オ)き讀給へる歌あり。かやうの例なるべし。さて一首の中の傍題の作例、

一 定家卿相語云、長綱百首の中、待_二春月_一

春雨の名残の軒ばかほるなり月待里のむめのしたかせ

是は雨後の梅を詠ずる歌にて候。近代は詞・姿はなだらかに優に候へ共、題のあるべきやうを心得ぬ歌の聞え候也。御心得候べし。たとへていはゞ、主の仰らるべき用事にて、民部卿・太夫・左衛門尉・藤内参れと仰られ候はんずるに、先めさぬ外記・太夫・馬允、めさるゝ物のくびにのりて、わき戸より出て候はんは心得ず候べきやうに、待_二春月_一をに梅・雨などがまじり候事を申也。又云、外記くびにのるとは、たとへば山の題に海を詠じませ、花の題に帰雁出来などしたる事也。朝とある題に朝霞・朝露など引かけられんこと、さらにはゞかりあるべからずと云云。これ春月はそへ物になりて、梅・雨が詮となりたれば傍題也。又、十八才

(十八ウ六百番歌合 秋雨

雨ふれど笠取山の鹿のねは中くよその袖ぬらしけり

判俊成卿云。雨ふれどゝはいへれど、袖のぬれけるも鹿のねによりてぞ聞え侍れば、鹿の題にてよめるとみえたるにやと云云。これも、雨よりは鹿のかたつよければ、傍題になりたるとかや。

一 光明峯寺撰政家歌合 寄筵恋

うちかへし衣かたしくさむしろに人の心をみる夢もがな

判定家卿傍題の衣、さしたる用もなしと云云。

一 八雲口傳云。題にいださぬ物を讀入こと、詮なし。連歌の傍題のごとし。ただし、これはことによりて一すぢに嫌ふべきにもあらず。春の題に秋の物をよみならべ、秋の題に春の景物を引ぐすること、更々用なしと云云。事によ

りてとあるに、心をつくべし。他物を讀そふる事、常の事也。しかるを、題の物はかるくて、讀そへたる物のつよくなるゆへに、傍題になれる也。鶯に梅をそへ、子規に桜・卯花などそゆる事、きらふべきにあらず。十八ウ

(十九オ)片題の事

片題病とて、歌のやまひのひとつなり。

一 幽齋聞書細川玄旨法印仰、佐方宗佐聞書云。片題といふは、たとへば物ふたつを讀いるゝ歌に、一をほめて一をそしるやうの事也と云云。物二を讀いるゝとは、たとへば花間鶯といふ題にて、花をほめて鶯をそしるたぐひ也。花鶯ともに賞翫すべき也。

落題の事

題の景物を讀おとし、又眼目と讀べき文字を讀おとしたるをいふ也。又前にある題をまはしてよみ、或は思はせて讀たる詠格、落題にまがひもの也。よくく可_二心付_一也。

一 八雲御抄順徳院勅作云。経信、翫_二池上_一の月を_一といふに、岩間の水とよみて用_レ池、俊頼は雨後野草に浅ちふと讀

て用_レ野、野亭はすゝのしのやなどいひつればあり。山家を軒ばの杉など讀るは、その景氣を思ひやる也。あながち題を讀入むとはせず、是を聞て歌心得ぬものゝ落題は、一定ありぬべき事なり。よくく思ひわくべしと云云。

おもしろく讀れぬ題の事

一 耳底記細川玄旨法印談、烏丸光廣卿聞書云。歌をよむに、なにとしても十九オ(十九ウ)おもしろく讀れぬ題あり。それをよく案に勞して功なき事也。それは、詞つゞきをうつくしくなどしてをくがよきなり。連歌などにもつかぬ所あるがごとし。山吹・杜若・つゞじなどはおもしろく讀れぬ題也と云云。

實字の事 題の文字の多ある中に、よむべきもあり、よまですつる文字あり。必よむべき文字を實字といふ也。

一 八雲口傳云。題の字多けれども、必しも字毎に讀入まじきもあり。此題には何の字こそ詮にてあるべきとみ分

て可讀入也。字毎に捨まじきもありと云云。字毎に讀入まじきもありとは、たとへば季陽已闌といふ題はむつかしく聞ゆれど、暮春の心にて相叶也。二星適逢と云題は、七夕の年に一夜あふ心にて相叶、商律欲_レ昼とあるは暮秋の心をよめば無相違也。又、字毎に捨まじきとは、池水半氷・遇不_レ逢恋・依_レ忍増恋・余_レ期変_レ物恋・等思_二兩人_一恋、此類不可勝計_一。

實字の類大略 實字の所、一をくわふ。十九ウ

二十オ〇出 〇鶯出_レ谷 〇紅葉出_レ垣、之類也。

鶯出_レ谷 家集 頓阿

光なき谷のふるすの鶯は_レいで_レやよその春をしるらむ

紅葉出_レ垣 続撰吟 雅世

立のぼる霧より下の籬より_レ又あらはる_レ庭のみみじば

〇入 〇晚鶯入_レ霞 〇山月入_レ簾、之類也。

晚鶯入_レ霞 百首 道堅

ねぐらにと梅が_レとめて鶯の_レかすみを分る_レ夕ぐれのこと

山月入_レ簾 家集 逍遙院

こすの内も_レあらはにみえで黛の縁ににほふやまのは月

末 〇梅未_レ開 〇雪未_レ深、之類也。

梅未_レ開 同 同

春寒き嵐にいかで任せましゝ速(き)もよしやむめの色かは

雪未_レ深

玉葉

観意

けふ迄はゝ雪ふみ分てかへる山これより後やみちもたえなん二十ウ

(二十一)オ傷 ○秋夕傷_レ心 ○見_レ月傷_レ老、之類也。

秋夕傷心

千首

師兼

わきてなどゝみにしむばかり物はおもふ夕に限る秋ならなくに

見_レ月傷_レ老

類

持季

老がみの心もに^(西)しの山のはにかたぶく月をゝあはれとぞみる

○厭 ○被_レ厭恋、之類也。

被_レ厭恋

御集

後柏原院

人にこそゝなきたる朝の我ならめ煙もきりも心ひとつに

○到 ○野遊到_レ春、之類也。

野遊到_レ春

千首

師兼

のどかなる春に心にあくがれて家路わするゝのべのゆふぐれ

○何 ○残花何在 ○晚鐘何寺、之類也。

残花何在

家集

清輔

白雲にまがひし花や残れるとゝうはの空にもたづね行哉

晚鐘何寺

千首

師兼二十一才

二十_一ウ里遠み山路の末に行くれぬ_一寺はいづくぞいりあひの鐘

○念(急) ○念_二早苗_一 ○念別恋、之類也。

念早苗

白川殿七百首

行家

けふのみと_一いそぐやたこの_二てもたゆく余りの早苗ふし立ぬまに_三

念別恋

御集

後柏原院

忍ぶらん_一人めにいそぐよふかさも月やはしらぬきぬ_くの空

○遥 ○帰雁遥 ○遥聞_二郭公_一、之類也。

帰雁遥

類

長淳

心あての佛もなし天つ空_一かすみはてつ_くかへるかりがね

遥聞郭公

続後拾遺

後鳥羽院

ほのかにも今や聞らん子規_一いや遠ざかるするの里人

○恥 ○花恥老、之類也。

花恥老

類

栄雅

せめてた_ら老やかくさで詠めましか(くさ)ば花の_一やつれもぞする

○掃 風掃_二落花_一、之類也。

風掃落花

同

賀茂成助二十一ウ

二二三オ我心いかにせよとて散つもる花さへ風のゝなをさせふらむ

○晴 ○晴天帰雁 ○五月雨晴、之類也。

晴天帰雁

家集

慈鎮

こしの山雪げの雲はゝはれのきてみどりを分るかりの諸声

五月雨晴

同

逍遙院

日のみ影涼しくもあるか五月雨のあめのやへぐも風に消つゝ

○初 ○初花 ○初恋、之類也。

初花

玉葉

前関白太政大臣

大かたの花のさかりも程もあらし庭の一木はゝさきそめにけり

初恋

続古今

雅経

ゝけふよりや人に心を沖つ波かけてもしらぬそでのうらかぜ

○早 ○草花早、之類也。

草花早

御集

後柏原院

秋を知らくさは同じ花ながらとく咲色ぞこゝろうつろふ

○似 ○卯花似レ月、之類也。

卯花似月

新古今

白川院二二三オ

二二三オ卯花のむらく咲るかきねをば雪間の月のゝ影かとぞみる

○白 ○梅白、之類也。

おしなべて花の匂ひも深きよの枕になるゝ梅の下かせ

○綻 ○散花始綻、之類也。

散花始綻 家集 慈鎮

咲初て松にかゝれる藤浪は残りおほかるにほひなりけり

○隔 ○霞隔_二遠樹_一 ○隔夜郭公、之類也。

霞隔遠樹 続古今 定家

みつ汐にかくれぬ磯の松のはも_見みらく少く霞むはるかな

隔夜郭公 類 閑白

此くれにきなかざりせば子規_身二夜ときかぬ_身みとやならまし

○遠 ○遠山朝霞 ●遠夕立、之類也。

遠山朝霞 家集 正徹

みえざりし霞かゝれる色ながら朝日にいづる_一はるのとをやま

遠夕立 玉葉 九条左大臣女

夕立の十市を過る雪の下にふりこぬ雨ぞ_一よそにみえゆく_二二十三才_一

_二二十三才_一 ○留 ○梅香留_レ袖 ○水留_二水声_一、之類也。

梅花留_レ袖 新古今 有家

散ぬれば匂ひばかりを梅花へありとやそでにはるかぜぞふく

水留ニ水の声を

続古今

中納言

冬さむみしのぶの山の谷水はへ音にもたてずさぞしのぶらん

○解 ○氷解、之類也。

氷解

類

雅親

よしの川氷はとけつ山桜はなのひもふけ春のはつかぜ

○共 ○共偽恋、之類也。

共偽恋

百首

逍遙院

へ人はいさうたがひ多きちぎりをもへ頼むになすぞわが実なき

○近 ○近萩 ○近恋、之類也。

近萩

白川殿七百首

為氏

うたたねの夜はの秋かぜをとたてへ枕になるへ庭のおぎはら

近恋

御集

後柏原院

そをだにも又なぐさめて中垣にへ声聞ほどのみを頼めとや二十三ウ

(二十四オ) ○契 ○契恋、之類也。

契恋

新後撰

法印定円

さなくてはへ頼め置しを偽のあるよぞ人のなさけなりける

○散 ○雪散_レ風、之類也。

雪散_レ風

御集

後柏原院

はるゝ間もをのが枝より_レ散雪や風のやどりの松をみすらん

○誓 ●誓恋、之類也。

誓恋

千載

修理太夫

うれしくは後の心を_レ神もきけ引しめ繩の絶じとぞおもふ

○両 ○鹿声両方 ○両方恋、之類也。

鹿声両方

家集

雅経

なれが住野べにさこそはたびねせめ_レあとまくらなるさをしかの声

両方恋

新続古今

教長

思へども_レみをし分ねば一かたはこゝろのほかのよかれをぞする

○遅 ○春日遅、之類也。二十四才

二十四ウ春日遅

家集

逍遙院

行やらず霞のそこにいづる日をみち引かたや空にまどへる

○送 ○花下送_レ日、之類也。

花下送_レ日

同

定家卿

木の下に_レ侍りし桜をおしむまでおもへば遠きふるさとのそら

○逐^レ日花盛、之類也。

逐^レ日花盛

類

永源法師

きのふにも^レけふは増れる花なればあすの匂ひを思ひ^(二)社^(一)やれ

○忘^レ花忘^レ老 ○忘恋、之類也。

花忘^レ老

家集

頓阿

さらでだにみの老らくは知れぬをいと^(レ)忘るゝ花さかりかな

忘恋

新後撰

為氏

よそにだに^レ思ひはいでじはしたかの野守の鏡影もみえねば

○別 ○別恋、之類也。

別恋

新勅撰

法印李清二十四ウ

二十五才相坂の夕つげ鳥も^レわかれちをうき物とてや鳴はじめけん

○纒^(わすか)

○寒草纒残 ○纒見恋、之類也。

寒草纒残

続古今

定家

吹風のやどすこのはの^レ下ばかり霜置はてぬ庭のふゆくさ

纒見恋

家集

俊成卿

谷ふかみ岩かきかくれゆく水の^レかげばかりみてぬるゝ袖かな

○弁 ○柳弁春、之類也。

柳弁^レ春

類

政為

花を^レきて^レをのれ時めく青柳の枝よりみゆる千世の春風

○幽 ○春月幽 ○幽居、之類也。

春月幽

御集

後柏原院

へだて^レの影こそかはれ春も猶^レ霞むそなたに月はすむらん

幽居

家集

逍遙院

たへて住心の道はある物をとはずはしらじ^レよもぎふのかげ

○蔵 卯花蔵宅、之類也二十五オ。

二十五ウ卯花蔵^レ宅

千載

藤原敦経

卯花の^レかきねとのみや思はまししづがふせやに煙た^レずは

○隠 ○隠恋、之類也。

隠恋

御集

後柏原院

我にのみ身はうつせみのこかくれて^レは^{（兼）}に置露ぞ袖にひかたき^{（）}

○帰 ○鶯帰^レ谷、之類也。

鶯帰^レ谷

新統古今

信実

谷川に行瀬の花はかへらねど^レをのれ^{（分）}ふるすにうぐひすぞ鳴

○変 ○変恋、之類也。

変恋

新拾遺

為舜

言のはのゝかはるにつけてうき人の心のいろも先(まづ)しられつゝ

○兼 ○兼厭レ暁恋、之類也。

兼厭レ暁恋

千首

師兼

きぬくのつらさをゝかねて思はずは逢夜ばかりも袖やほさまし

○難 ○冬夜難曙、之類也二十五ウ。

二十六オ 冬夜難レ曙

同

同

寒るよの夢の通路行かへりいく度してもあけぬ夜半かな

○依 ○依花待春 ○依忍増恋、之類。

依レ花待レ恋

金葉

内大臣

なにとなく年のくるゝはおしけれどゝ花のゆかりに春ぞ待るゝ

依レ忍増恋

新古今

公継

忍は(こ)じよ石間つたひの谷川も(こ)ゝせをせくに社水増りけれ

○尋 ○尋レ花 ○尋恋、之類也。

尋花

玉葉

定家

鳥の声霞の色をしるべにておもかげ匂ふゝはるの山ふみ

尋恋

新古今

慈円

心こそ行えもしらねゝ三木の山杉のこずえの夕ぐれのそら

○誰 ○紅葉誰家、之類也。

紅葉誰家

御集

後柏原院

うへ置て紅葉にあけるゝぬしやたれただ深山木の陰の家ゐは二十六才

二十六才○對 ○對 水待月、之類也。

對水待月

金葉

基俊

夏の夜の月待程のてすさびに岩もるし水（清）ゝ幾むすびしつ

○適 ●適逢恋、之類也。

適逢恋

類

小侍従

それとだに覚し物を日頃わがなげきわびつゝなれるころを

○乗 ○柳垂糸

柳垂糸

御集

後柏原院

浅みどり霞の衣空は猶ゝうちはへなびくあをやぎのいと

○互 ○互忍恋、之類也。

互忍恋

家集

逍遙院

しるらめやみだれ初てはいかにぞとゝ同じ心のしのぶもぢずり

○違 ○違約恋、之類也。

違_レ約恋

続古今

公夷

我を君まつよもあらばいひてまし頼めてこぬはさぞやつらきと二十六ウ

二十七オ〇染 〇露染紅葉、之類也。

露染_二紅葉_一

廣忠歌合(新千載) 讀人不知

白露のゝ染る紅葉のいかなればからくれなゐにふかくみゆらむ

〇添 〇霞染_二山色_一

霞染_二山色_一

御集

後柏原院

春の色をゝ花に匂はす霞よに心になびくよもの山かぜ

〇連 〇連峯霞 〇帰雁連雲、之類也。

連峯霞

同

同

つくばねの春のみかげや茂からんたてる霞のゝこのもかのもとに

帰雁連_レ雲

龜山殿七百首

為世

かへり雁うはの雲なる玉づさを霞む雲ちにゝかきぞつらぬる

告 〇鶯告春、之類也。

鶯告_レ春

新勅

俊頼

春ぞとは霞にしるし鶯ははなのありかをゝそことつげなん

〇積 〇積雪、之類也(二十七オ)。

二十七ウ積雪

続拾遺

頼氏

真柴かる道や絶なむ山賤のいやしきふれるよはのしら雪

○摘 ○摘_レ葦、之類也。

摘葦

千首

為尹

露ながら袖にすみれを一つみ入てかへればしたふのべの月かげ

○常 ○常見_レ花

常見_レ花

千載

白川院

咲しより散までみれば木の下に花も日数もつもりぬるかな

○半 ○花半散 ○池水半氷、之類也。

花半散

題林

光吉

山さくら梢に残る程ばかり庭にもつもるはなのしらゆき

池水半氷

続古今

後京極(良経)

池水をいかに嵐の吹分てこほれるほどのこほらざるらむ

○長 ○秋夜長、之類也。

秋夜長

家集

家隆二十七ウ

二十八オね覚して後も久しき秋のよは老ぬる人ぞ先知れける

○馴 ○鶯馴、之類也。

鶯馴

同

逍遙院

山ふかき心もしらで朝夕に一人待かほのうぐひすの声

○猶 ○紅葉猶色浅、之類也。

紅葉猶色浅

後拾遺

通俊

いかなれば舟木の山の紅葉々の一秋は通すぐれどこがれざるらん

○慰 ○花慰レ老

花慰レ老

御集

後柏原院

年くの花はさかりのならばしに幾度老いの身一みを忘るらん

○靡 ○柳靡レ風、之類也。

柳靡レ風

千首

師兼

吹さむるひま社なけれ青柳のなびくにしるし庭の春かぜ

○歎 ○歎二無名一恋

歎二無名一恋

家集

頓阿二十八才

二十八ウ逢二ことにかふる命になりやせん無名を一うしと思ひきゆとも

○空 ○待二郭公一空明、之類也。

待二郭公一空明

同

西行

子規一ななかで明ぬと告がほにまたれぬ鳥の声ぞきこゆる

○群 ○雪満群山、之類也。

雪満_二群山_一

新続古今

前大納言親雅

つくば山_一は山しげ山おしなべて残るかげなくつもるしらゆき

○結 ○柳_二結落花_一

類

花園左大臣

散花の柳の糸にむすばれてあらぬしづえに匂ひぬるかな

○恨 ○恨恋、之類也。

恨恋

続後撰

顕輔

つらしとて心のまゝに_一恨ても後の思ひにたへむものは

○内 ○年内立春、之類也。

年内立春

新勅撰

後堀川院二十八ウ

（二十九才あら玉の_一年もかはらでたつ春は霞ばかりぞ空にしりける

○浮 ○桜浮_レ水、之類也。

桜浮水

御集

後柏原院

桜花うつし残せる水の上は花のかぐみや_一又くもるらむ

○写 ○紅葉写_レ水、之類也。

紅葉写_レ水

家集

為家

散かゝる色だにあかし紅葉々の影みるかたの水のかぐみは

○移 ○桜移袖、之類也。

桜移_レ袖

同

逍遙院

今はとて昔にかふとも桜花うつりしそでのか^重をやしのばん

○埋 ○落花埋_レ路、之類也。

落花埋_レ路

千首

師兼

かへるさの_レ道はまどひぬ尋ねつる外山の花のちりのまがひに

○裁 ○裁_レ花、之類也。

裁_レ花

続後拾

定家卿二十九才

(二十九ウふりはつる身にこそ待ね桜花うへをくやどの春なわすれそ

○疎 ○疎_レ恋、之類也。

疎_レ恋

家集

頼阿

なをざりにみゆる物からながらへて恨とゝもに経ぬ中かな

○失 ○失_レ返事 (一) 恋、之類也。

失_レ返事_一恋

同

頼政

恋々てまれにうけ引玉札を又うしなひて又嘆くかな

○疑 ○疑_レ恋、之類也。

疑_レ恋

新後撰

為定

かねてより人の心もしらぬ世にちぎればとてもいかに頼まん

○薄 ○薄氷、之類也。

薄氷

続拾遺

頼康法師

さむしろはむべ寒からじかくれぬの芦間の氷一ひとへしにけり

○動 ○風動ニ野花一、之類也。

風動ニ野花一

家集

俊成二十九ウ

(三十オ君がよは遠里小野の秋萩も散さぬ程の風ぞふきける

○後 ○雨後月、之類也。

雨後月

新古今

宮内卿

月を猶まつらん物かむら雨の一はれ行く雲のすえの里人

○残 ○残雪、之類也。

残雪

続拾遺

前関白左大臣一条

春なれど猶風さゆる山陰に一こほりて残るこそぞのしらゆき

○臨 ○柳臨ニ池水、之類也。

柳臨ニ池水一

類

通宗

青柳の一うつれるかげを池水の底の玉藻と思ひけるかな

○寂 ○初昇月、之類也。

初昇月

千首

師兼

よし野山雲なき峯をへ出るよりひかりことなるあきのよの月

○延 ○見_レ花延_レ齡、之類也。

見_レ花延_レ齡

類

頭季三十才

三十ウ詠ればをのゝえさへそ_(一)朽ぬべき花こそ千世のためし成けれ

○思 ○思恋、之類也。

千載

公実

ひとりぬる我にてしりぬ池水につがはぬをし_(驚)のへおもふ心は

○落 ○雲雀落、之類也。

雲雀落

御集

後柏原院

春ふかきくさのは山の夕ひばりへ落くる程もそれとやはみる

○驚 ○荻驚_レ夢、之類也。

荻驚_レ夢

禅林寺殿七百首

御製

さらでだにねざめ_(寝覚)がちなる老らくのへ夢な覚_(覚)じて荻の上風

○多 ○早苗多、之類也。

早苗多

続後拾遺

為世

けふも又取手あまたにいそげども山田の早苗へ猶ぞつきせぬ

○惜 ○惜_レ花、之類也。

惜_レ花

家集

為家三十ウ

(三十一)オさくら花いからは後の春さへに_レ散をわかれとなをやしたはん

○重 ○草花露重、之類也。

草花露重

家集

頼政

枝よは^(弱)み露の白玉もちかねて_レよる^(夜)ふすのべのおみなえし哉

○折 ○折花、之類也。

折花

新後撰

右大臣

扱も猶さそひやすると桜花_レ手折てかぜのこ_レろをもみん

○悔 ○悔恋、之類也。

悔恋

玉葉

従一位教良

つゐにか_レる^(葉)うさにもならばなに_レわが思ふ心の_レ底をみせけん

○漸 ○花漸盛、之類也。

花漸盛

同

前大僧正道綱

さかりをば猶待えだの残れども_レあまた梢には^(花)なぞなり行

○易 ○花易_レ散、之類也。

花易_レ散

新千載

如法三寶院入道前内大臣三十一才

(三十一)ウ散がうえに又さそはれて春風の(巻)一 ふうくにまかする山さくらかな

○破 ○風二破レ暁夢一

風二破レ暁夢一

家集

後京極

みる夢はみやまおろしに絶はてゝ月は軒ばのやまにかゝりぬ

○待 ○待レ花、待恋、之類也。

待レ花

続千載

為家

さかぬ(巻)より花は心に一かゝれどもそれかとみゆるくもだにもなし

待恋

新古今

式子内親王

一君待とね(巻)やへもいらぬ榎のとにいたくなふけそ山のはの月

○毎 ○毎夜鶉川、之類也。

毎夜鶉川

類

済継

うかひ舟月待いでゝかへるさや一 夜をへて遅き夕やみのそら

○増 ○増恋、之類也。

増恋

家集

逍遙院

恋しきは一ますみのかぐみかけてのみかた時さらじ影にみえつゝ三十一ウ

(三十二)オ(ママ)稀 ○鶯稀 ○稀恋、之類(ママ)。

鶯稀

同

同

しらず又うきふしあれや呉竹のやどかれぐにうぐひすの鳴

稀恋

続千載

源兼氏

よしや又さても絶ずは天川におなじあふ瀬にたぐへこそせめ

○交 ○交^レ花、之類也。

交^レ花

千首

為尹

今いくか春の山べにしまじりても花の色にはあかずぞあらし

○勝 ○花勝^二前年^一、之類也。

花勝^二前年^一

類

称名院

こぞみしもけふみる花の色かには忘れぬものゝ^(去年)忘られやせん

○興 ○田家秋興、之類也。

田家秋興

新勅撰

宗通

賤のおの門田の稲のかりにきてあかでもけふをくらしつるかな

○深 ○深夜春月 ○深山桜、之類也。三十二才

(三十二才) 深夜春月

続古今

前関白左大臣

はれ間待心ばかりをなぐさめて霞める月に夜ぞ更にける

深山桜

金葉

摂政左大臣

嶺つゞき匂ふ桜をしるべにてししらぬ山路にまどひぬるかな

○経 ○松経_レ年、之類也。

松経_レ年

続古今

衣笠内大臣

住吉のきしのみづかき神さびて「その世もしらぬ松のかぜかな

○古 ○古柳、之類也。

古柳

家集

逍遙院

「ふりにけりいくぞの人の別路を衣とかみし青柳の糸

○焦 ○焦恋、之類也。

焦恋

同

頓阿

さりともと思ひしことも「むかしにて頼まぬ中を忘れかねつゝ

○如 ○卯花如_レ舟、之類也。

卯花如_レ舟

新古今

源道濟三十二ウ

「三十三才卯花のむらく咲る垣ねをば雲間の月の「かけかどぞみる

○越 ○遊士越_レ関

遊士越_レ関

新後撰

為家

鳥のねに「関のといづる旅人をまだよふかし(夜(深し))とをくる月かけ

○籠 ○霞籠_レ遠樹_レ、之類也。

霞籠_レ遠樹_レ

千首

師兼

ふりつみし梢の雪は消ぬれど霞にこもるみねのまつばら

○混 ○落葉混レ雨

落葉混レ雨

同

同

ねやにもるししぐれとのみぞ思ひつるこのはの音(音)に落る泪を

○得 ○梅開得レ客、之類也。

(梅開得レ客)

御集

後柏原院

梅が枝に(えだ)しきあるや人も鶯のねぐらあらそふ花の陰かな

○擇 ○擇(えら)レ紅葉、之類也。

擇(えら)レ紅葉

類

宇治前太政大臣

しづれをか心にとめんしぐれつゝ紅ふかくてるもみぢかな(三十三才)

○三十三才 ○照 ○月照(三十三才)、之類也。

月照(三十三才)、草前

千載

藤原親盛

浅茅原末葉(はすぢ)にむすぶ露(つゆ)ことに入光をわけてやどる月影

○明 ○明月、之類也。

明月

御集

後柏原院

分てみんし月もみちぬる空を(そら)社(やしろ)きずなき玉の光なりけれ

○逢 ○逢恋、之類也。

逢恋

新後拾遺

法師長舜

こよひかくくかはし初つる手枕に今はなみだのかゝらずもがな

○浅 ○紅葉浅、之類也。

紅葉浅

御集

後柏原院

へだてぬも薄きはたての色ならじ霧のひまみるさほの山風

○遍 ○子規遍、之類也。

子規遍

新後拾遺

権大納言為尹

遠近にへはや鳴ふるすほとゞぎす今は聞てもたれにかたらん三十三ウ

(三十四オ) ○頭 ○頭恋、之類也。

頭恋

新続古今

称名院 (三条西公条)

人しれぬ袖にさへ猶つゝみしをいかに世にもるなみだなるらん

○寒 ○寒月、之類也。

寒月

同

為成

夜半に行雲の波まで氷りけりへ寒る霜夜の月の光に

(○) 盛 ○盛花、之類也。

盛花

永徳御百首

為遠

けふみずばかひなからまし散もせずへ咲も残さぬ山さくらかな

(〇) 夾 (はさむ) 〇瞿麦夾水、之類也。

瞿麦夾水 (なでしこ) 類 源仲正

夏草の下行水に分られて二かたに咲やまとなでしこ

(〇) 先 〇梅先春開、之類也。

梅先春開 家集 (ママ)

芦垣のまぢかき春も知れけり一年のこなたに咲るむめが枝三十四才

(三十四ウ) 〇妨 〇新樹妨月

新樹妨月 千首 師兼

冬がれに月のくまとてみし程の影だにもらぬ夏木立かな

〇聞 〇聞恋、之類也。

聞恋 新後撰 有家

名にたてるおとはの滝もとにのみ聞より袖はぬるものは

〇消 〇氷消、之類也。

氷消 家集 正徹

末のよの人の心ぞとけがたき春のこほりはしたにむすばで

〇廻 〇鶺鴒廻、之類也。

鶺鴒廻 同 逍遙院

心をや此瀬ひとつに河嶋の「行めぐりてもうふねさすなり

○見 ○見恋、之類也。

見恋

続古今

今上

契をばあさかの沼と思へばやかつみながらにそでのぬらん三十四ウ

三十五オ○満 ○花満三 山河一、之類也。

吉野川岩本さくら咲にけり「みねよりつゞく花のしら雲

○短 ○春草短、之類也。

春草短

類

雅世

さまぐのゝべの草葉の生さきは雪に籠てみる程もなし

○径 ○野径霞、之類也。

野径霞

風雅

順徳院

夕つくひ霞むすゑ野に「行人の菅のをがさに春風ぞふく

○静 ○静見花、之類也。

静見花

続古今

太上天皇

めかれせぬ宿のさくらの花さかり我心さへ「ちるかたぞなき

○随 ○花随レ風、之類也。

花随レ風

家集

頓阿

「さそひ行風ばかりや桜花ちるをわかれとおもはざるらむ

○忍 ○忍恋、之類也。三十五才

(三十五ウ忍恋

新古今

太上天皇

我恋は枝の下葉にもるしぐれぬ(音)るともそでの「色にいでめや

○知 ○帰雁知「春、之類也。

帰雁知「春

玉葉

資季

古郷に今か待らんかへるさの「時をわすれぬはるのかりがね

○滋 ○夏草滋、之類也。

夏草滋

家集

逍遙院

まじりなば麻もかへりていかならん「ころのまゝに茂るよもぎは

○頻 ○郭公頻、之類也。

郭公頻

千首

雅永

五月山木のまもりくる郭公「幾声きゝつこゝろつくさで

○映 ○紅葉映「日、之類也。

紅葉映日

千首

雅縁

しぐれさへ猶下染となりにけり「夕日にてらすみねの紅葉々

○久 ○久恋、之類也。三十五ウ

(三十六才久恋)

続古今

太上天皇

思ひつゝへ(戀)にける年のかひやなきたゞあらましの夕ぐれの空

○独 ○独聞二時雨一、之類也。

独聞二時雨一

続古今

徳大寺左大臣

袖ぬらす小夜のねぎめの初しぐれ同じ枕に一聞人もがな

○不 ○不レ逢恋、之類也。

不(レ)逢恋

新古今

藤原基輔

いつとなく汐焼海人の苔ひさし久敷なりぬ一あはぬおもひは

○欲 ○欲レ別恋、之類也。

欲レ別恋

新千載

為藤

聞あへぬ夕つげ鳥の初こゑに一まづしたはれてぬる一そでかな

○過 ○夕立過、之類也。

夕立過

御集

後柏原院

日影にて又露はらふ草の上のかぜものこらぬゆふだちの跡

○透 ○萤火透簾、之類也。(三十六才)

(三十六ウ萤火透レ簾)

家集

慈鎮

軒ちかくまがふ螢のすき影にげに玉だれのこすかけてけり

右いだす所の實字は、必ずよむべき文字也。或は、詞にあらはしてもよみ、又は一首の心にまはしても讀也。すべてまはすべき文字とは此類也。よくく可_二思惟_一者也。

虚字の事 虚字といふは、文字には出ながら、すて、不_レ可_レ讀文字也。

○外 ○野外野外露、之類也。○戸外戸外權、之類也。天外天外遊糸、之類也。

右、外之字、いづれの題にてもすて、不_レ讀文字也。

○邊 ○海邊海邊霧、之類也。○水邊水邊螢、之類也。○池邊池邊藤、之類也。○川邊川邊花、之類也。○江邊江邊螢、之類也。○橋邊橋邊月、之類也。

右、邊之字ある題、あまたありといへども、いづれもほとりの心にて不_レ讀文字也。

○上 ○海上海上月、之類也。○池上池上藤、之類也。○河上河上霧、之類也。○江上江上月、之類也。

右之字、いづれも邊の字にひとし。

○天 ○曉天曉天落花、之類也。三十六ウ

(三十七オ右、曉天といでたる天の字は、皆虚字也。其外、天とある題は實字也。まがふべからず。

○更 ○曉更曉更萩、之類也。○深更深更月、之類也。

右、曉更は曉をよめ無_二相違_一、深更は深夜の心にて相叶。

○端 ○雲端雲端雁、之類也。○草端草端螢、之類也。

右、雲端は雲、草端は草を讀ば相叶、端の字心なし。

已上、實字・虚字ともに雖_レ不_レ可_二勝計_一、其大略をしるし (おはんぬ) 畢。

實字のたぐいひは、証歌にて可心得也。虚實は不_レ及_二証歌_一をや。三十七オ

(二二卷に続く)